

プロテスタント教会建築の機能とかたち

——ルター派とカトリックの比較を中心に

岩谷秋美

はじめに

本稿は、教会建築の機能とかたちに注目しつつ、プロテスタントの思想がどのように建築へ反映されているか、中世から二十世紀までのドイツの作例をとおして概観するものである。まず第一章にて宗教改革以前、すなわち初期キリスト教時代からゴシック末期までにおける教会建築の発展の様子を観察する。続く第二章以降では、プロテスタントの代表的な、あるいは特徴的な教会建築とその内装を、時代ごとに見てゆく。ただし本稿は、体系的なプロテスタントの建築史の構築を目指すものではなく、限られた作例の中で、思想と教会建築の関係を考察し、空間分析の可能性を模索するものである点に留意されたい。

一、宗教改革前

キリスト教の教会建築のはじまりは、古代末期において「キリストの救いのわざを記念し、主の晩餐を祝うために」ひとびとが集会を行った空間に求められる。迫害下での集会所は地下室など目立たない場所が選ばれたが、キリスト教公認後は地上で公に礼拝が行われるようになった。このときに使用されたのが、バシリカと呼ばれる、古代ローマ帝国で世俗の集会所として使用されていた建築タイプである。ただし、古代ローマ人はバシリカの長辺中央に入り口を設けて、空間を左右に広がるものとして使用していたが、キリスト教徒は短辺に入り口を設け、空間を奥に進むものとして使用した(図1、2)。このように同じ長方形平面をもつ空間であっても、古代バシリカのごとく、

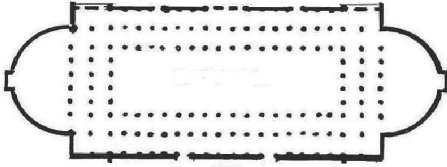


図1 古代のバシリカ

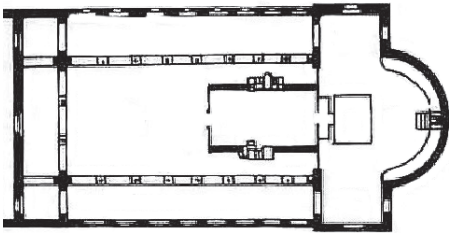


図2 初期キリスト教時代のバシリカ

長辺に入り口を設けることで、空間が左右に広がる場合、本稿ではこれを「横軸方向に空間を使用する」と表わし、一方、初期キリスト教建築のように、空間が奥へ伸展する場合、これを「縦軸方向に空間を使用する」と表わしたい。

さて初期キリスト教建築において、縦軸方向に伸展する空間の最奥、つまり入り口の反対側となる東には、半円形アプシスが設けられ、祭壇（聖餐卓）と、司式者である司教や司祭の席が設置された。あわせて、ことばによる典礼で用いられるアンボ（聖書朗読台）も置かれ、さらに、礼拝を執り行う場が聖な

領域であることを示すために、あるいは床が高くされ、あるいは内陣障壁で取り囲まれたのであった。身廊には、福音書などのための朗読台が用意されることもある。また、初期には教会堂付属の洗礼堂に水槽が設置されていたが、やがてこれに代わるものとして、簡便な洗礼盤が早い段階で登場し、その多くは教会堂の入り口に置かれるようになった¹⁾。

やがて教会堂を訪れる信徒の数が増え、礼拝への要求が多様性を帯び始めると、個別の需要に応じるべく、翼廊が追加され、内陣を取り囲む周歩廊や、その周歩廊に沿って放射状に並ぶ祭室が設けられ、あわせて外陣側廊にも祭室が配されるなど、教会建築は複雑に、そして巨大になってゆく。内陣は初期から壇や障壁により聖域として区分されていたが、この障壁自体も発展を遂げる。たとえばマクデブルク大聖堂 (Magdeburg, Sachsen-Anhalt) では、おそらく十三世紀頃、内陣と外陣の間を区分するコの字型の内陣障壁が置かれた(図3)。本内陣障壁は二層から構成されており、下層の中央に祭壇とその左右に内陣への入り口が、上層中央には説教壇が設けられ、両脇に階段も備わっている。このように内陣障壁は、内陣と外陣を結ぶ入り口だけでなく、平信徒に向けた祭壇や説教壇までをも有する、もはや独立した建造物と化し、いっそう堅固で越えがたいものとして平信徒の前に立ちただかるようになった。内陣は、近づくことはおろか、見ることもできない聖域と化したのである。



図3 マクデブルク大聖堂、内陣障壁、13世紀頃



図4 ニュルンベルク、ザンクト・ローレンツ聖堂、内陣、1477年

宗教改革直前の典礼と建築の関係を伝える好例は、ニュルンベルク (Nürnberg, Bayern) のザンクト・ローレンツ聖堂である。十三世紀に建設された外陣がバシリカ式であるのに対して、十五世紀に再建された内陣では、この時代のドイツに典型的なホール式が採用された(図4)。外壁は二層式となり、上下層ともにステンドグラスがはめこまれ、陽光が内陣内部へと降り注ぐ。堂内はさまざまな寄進物で彩られた。内陣ヴォールトの中央から吊り下げられているのが、一五一七年三月、つまりヴィッテンベルクの神学者マルティン・ルターが『九十五ヶ

条の論題』を世に問う半年前に注文されたフアイト・シュトールスによる《天使の挨拶》である。これは、その手前に吊るされている《マリア燭台》とともに典礼を演出する機能を負っていた³。すぐ隣には、アーダム・クラフトが十五世紀末に制作した、天井まで届く巨大な聖体顕示台がある。ホスチアを捧げる厨子までは階段で登れるようになっており、典礼の聖体拝領の際、ここは一種の舞台として機能したと考えられる⁴。ほかに、周歩廊祭室にはさまざまな人物により寄進された祭壇が置かれた。以上のように宗教改革前夜には、典礼の複雑化や私的礼拝の増加といった状況を反映させ、聖堂空間が複雑になっていたのである。

二、宗教改革後

宗教改革により、教会堂の機能やかたちはどのように変更されたのか。とりわけ以下に三点挙げるカトリックとプロテスタントの相違が、教会建築に重要な影響を与えたと考えられる。第一に聖像への態度、第二に礼拝形式の相違である。宗教改革直後にはまだプロテスタントのための教会堂は建設されず、既存の、すなわちカトリックの聖堂がそのまま使用されたが、プロテスタントの思想に沿うよう、内装や使用方法には変更が施された。ザンクト・ローレンツ聖堂の場合、教会堂自体は引き続き使われたものの、一五一九年以降、《天使の挨拶》とい

う聖像は美しい布で覆い隠され、また一五二五年にカトリックの典礼が禁止されるにともない、聖体顕示台も使用されなくなったのである⁵。

宗教改革後の変化として、第三に、説教および賛美歌が重視されるようになった点が挙げられる。トルガウ(Torgau, Sachsen)のハルテンフェルス城礼拝堂は、一五四四年、ルターと所縁の深いザクセン選帝侯ヨハン・フリードリヒ豪胆公が、プロテスタントの新しい礼拝のために新たに建設したものであり、プロテスタントの教会建築の最初に位置付けられる(図5、6)。礼拝堂は長方形で、西側に祭壇と、その上方にオルガンが設置された。当初置かれていた祭壇画はルーカス・クラナハ(父)⁷の工房で制作されたもので、中央パネルは「最後の晩餐」という、ルターがプロテスタントの礼拝用に推進した図像が、そして翼部には「弟子たちの足を洗うキリスト」と「ゲッセマネの祈り」という、最後の晩餐前後の物語が描かれた。なお祭壇の配置場所として、慣例的な東ではなく西が選ばれた理由とは、祭壇と向かい合う場所に選帝侯の席を設け、なおかつこれを東側にある選帝侯の居住空間と直結させるためだと指摘されており、したがってプロテスタントの教義に由来するものではない。祭壇前方には、木製の柵で囲まれた聖歌隊のための空間が用意され、長辺中央には説教壇が配された。さらに特筆すべきは、それまでの聖堂では司教座など聖職者たちのための椅子しかなかったのに対して、本礼拝堂では説教を聴



図5 トルガウ、ハルテンフェルス城礼拝堂、1544年

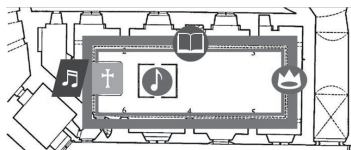


図6 同、平面図



平面図の凡例

祭壇と隣接する壁面に説教壇とオルガン¹⁰が設置され、これ以外、すなわち南を除く三面に棧敷席が設けられた。なお祭壇には使徒信条のレリーフが、そして説教壇の中央には「主の変容」と四人の福音書記者像が描写された¹¹。

本礼拝堂の革新性は、第一に、北側長辺に入り口

く会衆のための椅子が置かれ、あわせて礼拝堂を取り囲むように、祭壇側には一層の、それ以外の面には二層の棧敷席がめぐらされた点である。この礼拝堂は、一五四四年、ルターその人によって献堂された。その献堂式は、これまでのカトリックの慣習とは異なり、ルターによる説教のことばと、会衆と聖歌隊による賛美歌をもって執り行われるものであった。

ヴュルテンベルク公クリストフの下で建設され、一五六二年に献堂されたシュトゥットガルト(Stuttgart, Baden-Württemberg)の旧城礼拝堂は、さらに革新的である(図7、8)。十九世紀に改修されたためオリジナルの内装は部分的にしか保持されていないが、当時の状況としては、南側中央に設けられた半八角形アプシスに祭壇、その後ろに磔刑像、そして



図7 シュトウツガルト、旧城礼拝堂、1562年

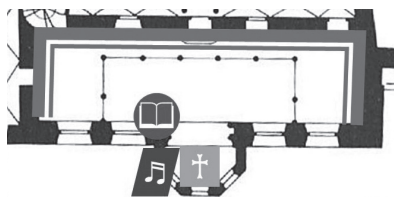


図8 同、平面図

を設けて空間を横軸方向に使用し、第二に、南側長辺中央に説教壇と祭壇を並べて配置した点にある。ただしこの発想自体は、実は伝統に即したものだとしてエルヴァルトによって指摘されている。すでに確認したとおり、カトリックの聖堂では縦軸方向が重視され、最奥の祭壇のある領域が聖域、つまり、ヒエラルキーの頂点として演出された(図2)。一方で説教壇は、縦軸(長辺)の中央に置かれた。堂内におけるひとつの動きを見ると、典礼の際には縦軸最奥に集まり、説教の際には縦軸(長辺)中央に集まることになる¹²⁾。いわば、ひとつの教会堂空間が典礼と説教で使い分けられていたのである。これらをひとつに統合したのが、シュトウツガルトの旧城礼拝堂である。改めて観察してみよう。本礼拝堂は、カトリックと異なり、空間を横軸方向に使っている。ただし入り口の反対側に多角形 آپシスを設けるといふ発想自体は、カトリックの伝統である。そして教会堂の長辺中央に説教壇を置くのも、カトリックの伝統なのである。つまりエルヴァルトが主張するところの、本礼拝堂における革新性とは、空間を縦軸ではなく横軸方向にて使用することにより、教会建築の伝統を再解釈し、説教壇と آپシスの位置を一致させ、教会堂が担うべき礼拝

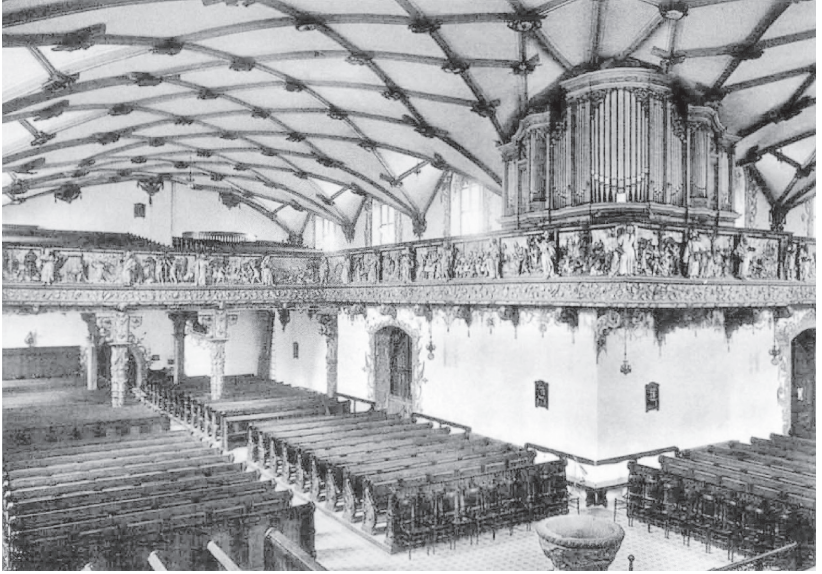


図9 フロイデンシュタット教会堂、1608年（戦前の様子）

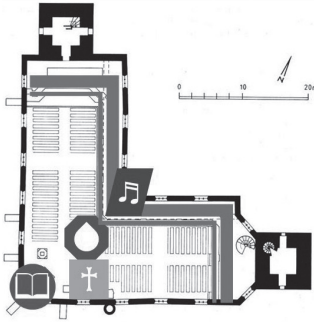


図10 同、平面図

よって寄進されたフロイデンシュタット (Freudenstadt, Baden-Württemberg) の教会堂である (図9、10)¹⁴。一六〇八年に完成した本教会堂の平面はL字型をしており、さらにその両端に扉口が設けられていることから、あたかも北と東ふたつの教会堂を直角に組み合わせたかのような印象を与える。こうした特異

と説教の機能を一所にまとめあげた点にあると言える。このように短軸が主要軸となる（横軸方向に空間を使用する）横軸型教会堂 (Querkirche) の形式、および、内陣脇の壁あるいは柱に説教壇を設置する形式は、これ以降、プロテスタントの教会建築でたびたび採用されることになる¹³。

三、三十年戦争前後

十七世紀にはいると、三十年戦争（一六一八～一六四八年）の勃発にともないドイツでの建設活動は停滞するが、当時のプロテスタントが建築形式を模索していた状況を伝えるものとして、戦争前後に建設されたふたつの作例を紹介したい。まず、町の建設者でもあるヴュルテンベルク公フリードリヒに



図11 シュバイアー、三位一体教会堂、1725年

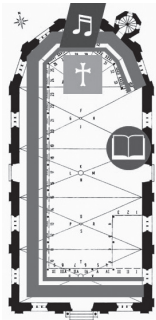


図12 同、平面図

な形式は、教会堂の空間を男女に分けて使用するためというのが通説であったが、ウェークスはこれを誤解と見なし、東翼は異なる共同体が使用する場合のための空間だと主張している。また、通常は専ら北翼のみが使用されており、それゆえ室内では北翼の主軸を基準として祭壇、説教壇、洗礼盤、そしてギャラリーの上にオルガンが配置され、一階には女性、説教壇付近には一部の男性とラテン語学校の生徒たちが座り、北棧敷席には男性が職業に応じて分けられて座し、そして東棧敷席には少年たちが座っていたという¹⁵。

十八世紀初頭に建設されたシュバイアー(Speyer, Rheinland-Pfalz)の三位一体教会堂では、本来は祭壇が置かれるべき長辺の東側中央に説教壇が置かれ、これを囲むごとく残りの三面に棧敷席が配されている(図11、12)。したがって、説教を聴くための〈ことばの軸〉が重視されていると解されよう。この軸と直交するように〈礼拝の軸〉が長軸として引かれ、その頂点に祭壇が、その上にはオルガンが設置される。天井や棧敷席側面は豊かな壁画で彩られており、すなわち木造の天井には「原罪」や「受胎告知」、「三位一体」などが、棧敷席の上段には旧

約聖書の、下段には新約聖書の物語が展開する。これらは、いわゆる〈貧者の聖書(Biblia pauperum)〉として機能していたのである¹⁶。



図13 ドレスデン、宮廷聖堂、1751年

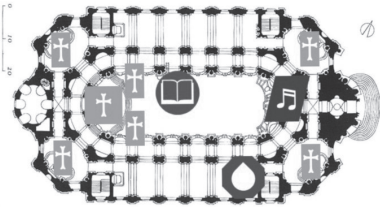


図14 同、平面図

アウグスト強力王は一七〇八年、宮廷にてカトリックの典礼を執り行うために、宮廷劇場を取り壊わし、そこに宮廷礼拝堂を建設させた。さらに強力王の歿後となる一七三九年、この礼拝堂を手狭と考えた息子フリードリヒ・アウグスト二世¹⁸は、場所をエルベ河畔に移して新しい宮廷聖堂の建設に着手した。こうして一七五一年に完成したのが、本稿でカトリックの作例として注目するドレスデン宮廷聖堂（現在の聖三位一体大聖堂）である（図13、14）。本聖堂には縦長の楕円形平面が採用され

四、バロックの時代

続いて十八世紀のザクセン公国に注目する。教会建築を考へる上で踏まえるべきは、一六九七年、ザクセン選帝侯フリードリヒ・アウグスト一世（強力王）が、政治上の理由からカトリックへ改宗したことだろう。この改宗により選帝侯はカトリックの王国ポーランドの王位を手に入れる¹⁷。一方で市民たちは引き続きプロテスタントであり続けた。こうした状況下で建設された、宮廷都市ドレスデン（Dresden, Sachsen）におけるカトリックとプロテスタントの教会建築を、それぞれ観察したい。

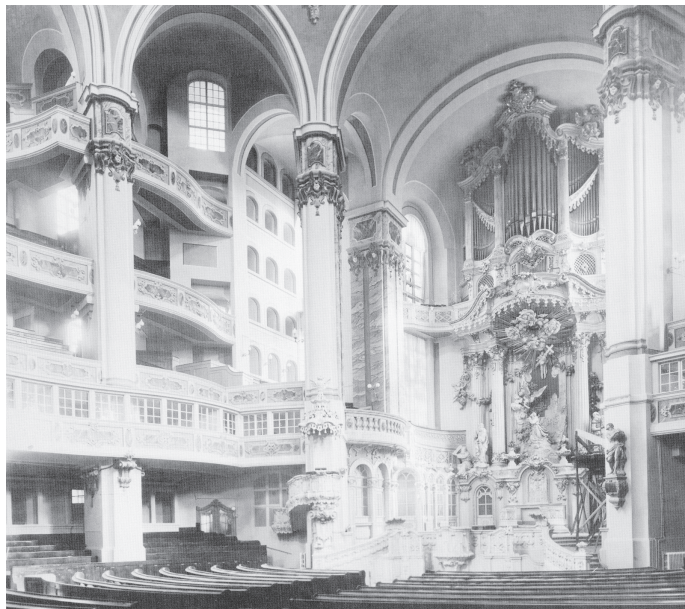


図15 ドレスデン、聖母教会堂、1743年(戦前の様子)

た。内部では二階建てのアーケードが、典礼の際に主軸となる長軸方向を強調する。東の主祭壇は大理石と鍍金されたブロンズから成るロココ様式の華やかなもので、中央に

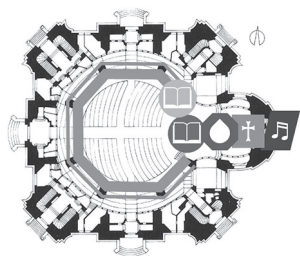


図16 同、平面図

は宮廷画家アントン・ラファエル・メンクス¹⁹による二七六五年の《キリスト昇天》が配された。オルガンは主祭壇とは反対側となる西面上方に、説教壇は縦軸の中央付近に、洗礼盤は南の扉口付近に置き、これ以外にも多数の祭壇を設置し、さらにはザクセン選帝侯の霊廟としての機能も備えるなど、本聖堂はカトリックの伝統を十分に受け継いだ豪華絢爛な建築だと言える²⁰。

一方、プロテスタントのドレスデン市民たちの意向を反映させたのが、聖母教会堂である(図15、16)。十八世紀初頭、ドレスデン市はアウグスト強力王の賛同を得て、ゴシック様式の旧教会堂を建て替えることにした。一七二二年、建築家ゲオルグ・ペーア²¹の下で建設が始まり、一七三四年、クーポラやオルガンは未完成だったにもかかわらず、献堂された。献堂を

急いだ理由としては、カトリックの宮廷とプロテスタントの市民との間に緊張関係があったためと考えられている²²。本教会堂の平面は正方形で、縦軸や横軸といった方向性をもたない集中式建築である。その四隅に階段室を設置することで、内部空間は実質的にギリシャ十字型という象徴的な形を示すことになる。

本教会堂の手本となったのが、平土間の観客席を中央に置き、その周囲を何層ものボックス席と棧敷席が取り囲む劇場建築であることは、一目瞭然であろう。同時代の建築理論家はプロテスタントの教会建築の重要な機能として、多くのひとつとびとが集まり説教を見て聴くという点を挙げ、ゆえに古代やバロックの劇場建築を最適な手本として位置付けているのだが、この理論が本聖堂に反映されたとマギリウスは指摘している²³。実際、集中式建築の三面もが出入り口として開放される点、同じく三面に三層のギャラリーがめぐらされて、地上階とあわせて三、五〇〇人を収容できる点、中央にはクーポラが架けられ、光の満ちあふれる明るい講堂となつている点、そして東に祭壇とオルガンのための舞台のごとき壇を設けている点などを踏まえたならば、この建築が、劇場建築に倣い、見ることと聴くことを重視しているとわかる。

祭壇とオルガンの手前には説教壇が置かれ、両側の階段から登ることができるようになっていた。ただしベアアの歿後すぐ、頭上に反響板を備えたもうひとつの説教壇が、内陣手前、北側の柱に新設された。この新しい説教壇は、音響上の改善を図るために設けられたと説明されている²⁴。つまり、これほどの大人数を収容するホールにおいて説教の声を空間の隅々まで行きわたらせるというのは、容易なことではなかったのである。そして後代になつてから、祭壇と説教壇の間、すなわち教会堂の中心軸上に、洗礼盤が置かれたようである。

五、ロマン主義・古典主義の時代

本章では、十九世紀前半のプロイセン王国へ目を移したい。一六一三年、ブランデンブルク選帝侯にしてプロイセン公だったヨーハン・ジギスムントが政治上の理由から改革派へ改宗して以来、プロイセンではルター派と改革派が混在する状況が続いていた。一八一五年、三十八の邦国から構成されるドイツ連邦が成立したのち、宗教改革三百周年にあたる一八一七年、ドイツ連邦の中心的位置を占めたプロイセン王国の王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世は、ルター派教会と改革派教会を統合する。一八二二年には礼拝式文の改革も行われたが、それはカトリックの典礼の要素を取り入れた、折衷的なものだったと指摘されている²⁵。

こうしたカトリック化とも言える傾向は、教会建築にも認められる。本稿ではふたつの例を確認したい。まず、建築家カール・フリードリヒ・シッケル²⁶が改築を担ったベルリン大聖堂である。一八一七年に献堂された改修後の大聖堂は現存しないため、当時の図面を分析したフランツ・ドゥーメの考察を手掛かりに、その空間を確認したい。改修前のバロック建築（一七五〇年）では、西の祭壇よりも、中央の説教壇が空間の中心的位置を占める横軸型教会堂であったことは、円柱の並びからわかる（図17）。とりわけ二連の円柱が説教壇の両脇のみに配される効果により、説教壇が教会堂の中心として強調されて

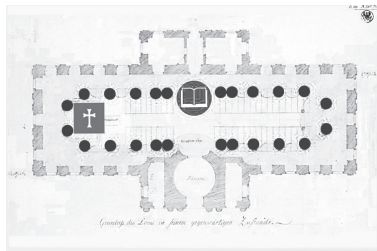


図17 シンケルによるベルリン大聖堂平面図(改築前)、1816年、ベルリン版画素描室、SM 26a.12a

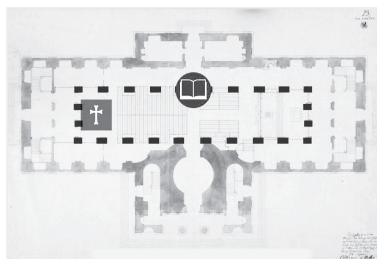


図18 同、平面図(改築案)、1821年、ベルリン版画素描室、SM 26a.31

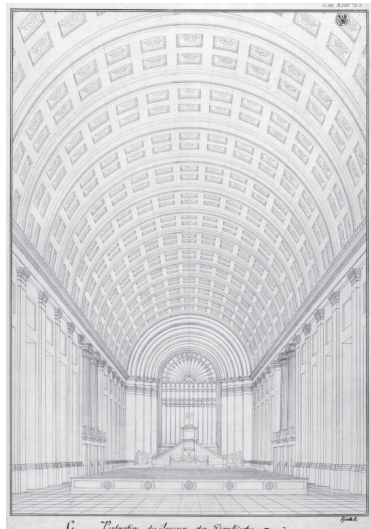


図19 同、透視図(改築案)、1816年、ベルリン版画素描室、SM 26a.10

いる。この教会堂をシンケルは、次のように改修した。まず円柱を均等なピラスターに代え、さらにトンネルヴォールトを架けることで、長軸方向を強調した(図18、19)。あわせて祭壇を壇上に置き、十字架や燭台、祭壇画で飾った²⁷⁾。つまりシンケルは、バロック期の横軸型教会堂を、長軸方向へ奥行きのある空間に変え、カトリック的な特色を強めたと言える。

次に、シンケルが新たに建設したベルリンのフリードリヒヴェルダー教会堂を観察したい。フリードリヒヴェルダー地区の改設計画にともない、教会堂の新築案が求められたのは、一八二四年頃のことであった。現存する構想図を見ると、シンケル自身は当初、ギリシャ神殿風の古典様式も候補に挙げていたことがわかる²⁸⁾。だが最終的には、ネオ・ゴシック様式による

レンガ造の教会堂が建設された(図20)。これはシンケルの意図というより、国王や王子の趣味に合うよう修正された結果だと指摘されている²⁹⁾。いうまでもなくゴシック様式の教会建築は、長軸方向の空間作用が強く、最奥の内陣を聖域として演出する場合に優れた効果を発揮する。したがって本教会堂における空間作用は、これまでのプロテスタント建築が目指してきた、礼拝と説教を中心とする一体化空間の理念からは大きく外れており、いわば、中世のカトリックへと回帰したものと言えるだろう。

こうしたカトリック的とも言えるゴシックへの志向は、ナポレオン戦争後に高まったナショナリズムから説明される。宗教改革の時代にあつてプロテスタント化が食い止められ、かろう



図20 シンケルによるベルリンのフリードリヒヴィエルダー教会堂の透視図、1828年、ベルリン版画素描室、SM 21a.8

じてカトリックに踏みとどまっていた地域の筆頭は、ケルン大司教領である。その大司教座聖堂であるケルン大聖堂の造営は一二四八年に始まっていたが、やがて造営資金が底を突き、一五六〇年には工事が完全に停止してしまい、内陣や西正面の一部のみが完成しただけの状態で三百年ちかく放置されていた。ナポレオン戦争後、ドイツ連邦の一部となったケルンでは、ナシヨナリズムの高まりを背景に、ケルン大聖堂という、カトリック信仰の拠り所であり、なおかつ中世ドイツの伝統を有したゴシック大聖堂を、完成させることになった。実はこれは、カトリック側だけでなく、宗派を超えて、プロテスタント側からも強く望まれたことであり、そのためドイツ連邦の一大事業となったのである³⁰。

六、十九世紀後半

十九世紀後半になると、プロテスタントの教会建築のあるべき姿が明文化されるようになる。その筆頭に挙げられるのが、一八六一年にアイゼナハ(Eisenach, Thüringen)開催の教会会議で定められた「プロテスタント建築のための条例」いわゆる「アイゼナハ規程(Das Eisenacher Regulativ)」である。教会堂平面の形や様式、素材、入り口や塔の場所などに言及するその内容は、しかしながら保守的とも言えるものであった。全十六ヶ条のうち、本稿の趣旨と関連する部分を以下のとおり抜粋する³¹。

- 一、すべての教会堂において、慣例どおり、内陣(Altarraum)を日の出の方向に設置すること。
- 二、プロテスタントの礼拝に最適な教会堂平面とは、縦長の長方形である。〔……〕。
- 七、内陣は教会堂の床よりも二段高くすること。〔……〕障壁などを用いて内陣を外陣から区別してはならない。
- 八、祭壇は、礼拝上の、もしくは音響上の必要性から、内陣アーチと壁の間の手前か奥に設置すること。〔……〕内陣の床よりも一段高くすること〔……〕。
- 十、説教壇は、祭壇の前後あるいは上ではなく、〔……〕内陣と外陣が接続する場所に設置すること。〔……〕

説教壇の高さは、本質的に棧敷席の高さとすること。
〔……〕。

十一、オルガンおよび独唱者と聖歌隊の場所はともに、祭壇の反対側、すなわち西端の主要入り口上のギャラリーに設けること。〔……〕。

十三、ギャラリーは、西側のギャラリー（第十一条参照）のほかは、「棧敷席として」教会堂の長辺沿いに設置すること。教会堂の中をすべて見渡せるようにすること。
〔……〕。

十四、会衆の座席は可能な限り、礼拝の最中、祭壇と説教壇を同時に見ることができるようになること。〔……〕。

十六、プロテスタントの教会建築のための以上の原則は、あらゆる段階で教会当局によって適用されるべきであり、造営主はこれを理解すべきであり、教会団体はこれを確認すべきである〔……〕。

本規程は、「二、プロテスタントの礼拝に最適な教会堂平面」として、横軸型ではなく、「縦長の長方形」を推奨し、また「七、内陣は教会堂の床よりも二段高く」し、あわせて「八、祭壇は〔……〕内陣の床よりも一段高く」することを求めるなど、内陣を聖域として区分するカトリック的な傾向にあると言える。そのためプロテスタントの中でも、本規程に賛同する保守派と、反対する自由派との間で論争が生じたという³²。

議論の末、ヴィースバーデン (Wiesbaden, Hessen) の牧師 エミール・フェーゼンマイヤー³³は、「アイゼナハ規程」に対抗すべく、これから建設される新しいプロテスタント建築のためのプログラムをまとめ、これを一八九一年に「ヴィースバーデン要綱 (Das Wiesbadener Programm)」として発表し、教会建築の理想を示した。この要綱は以下のとおり、全四ヶ条から構成される³⁴。

一、教会堂は、祝福された会衆たちが集まる家としての性格を備えるべきである。カトリック的な意味における神の家とされるべきではない。

二、会衆の一体化と万人祭司の原則は、空間印象の一体化を通じて示されるべきである。複数の廊へと空間を分割したり、外陣と内陣を分離させたりしてはならない。

三、聖餐式は、特別な空間ではなく、会衆の中で行われるべきである。祭壇は周囲から見えないものでなくてはならず、象徴性を控えめにして、適した場所に置かれること。すべての視線が祭壇へと導かれるようにすること。

四、説教壇は、会衆の精神的な糧としてキリストが供される場であり、少なくとも祭壇と同等の価値が与えられるべきである。説教壇は祭壇の後ろに配し、オルガンと聖歌隊の舞台とともに、会衆から見えるようにすること。

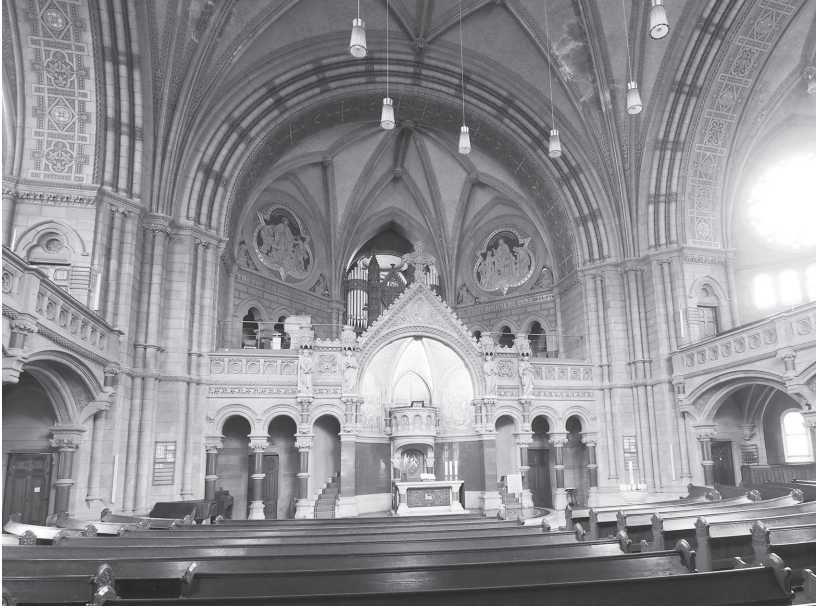


図21 ヴィースバーデン、リンク教会堂、1894年

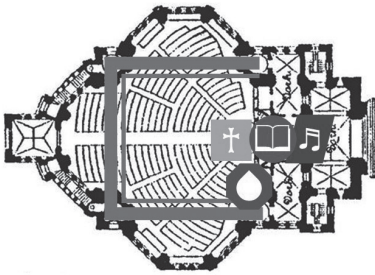


図22 同、平面図

成させたヴィースバーデンの改革派教会堂である(図21、22)³⁶。この教会堂は後に、接している通りの名称に基づいてリンク教会堂と呼ばれるようになった。建築平面は、 $\frac{3}{8}$ 八角形で閉じられた三葉型である。一見したところ複雑な形ではあるものの、象徴的なギリシャ十字型平面をもつ集中式建築として理解される。

このように「ヴィースバーデン要綱」は、まず「一、教会堂は〔……〕会衆たちが集まる家」であるとして、「カトリック的な」教会建築の理念を否定した。さらに「二、〔……〕空間印象の「一体化」を進言し、「三、聖餐式は〔……〕会衆の中で行われるべき」だと強調した。端的に言うなら、内陣を聖域と見なすカトリック的なヒエラルキー空間を拒絶したのである。また「四、説教壇は〔……〕祭壇と同等の価値」があると考え、両者の併置を推奨している点は、「アイゼナハ規程」が第十条にて説教壇と祭壇の分離を定めたのとは逆の考え方だと言えるだろう。

以上の「ヴィースバーデン要綱」に基づき建設された教会堂を、ふたつ紹介したい。まずは、ベルリンの建築家ヨハネス・オツェン³⁵が一八九四年に完成させたヴィースバーデン



図23 カールスルーエ、ルター派教会堂、1907年

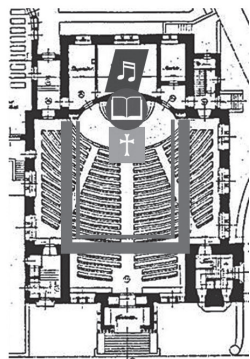


図24 同、平面図

中心軸上に祭壇、説教壇、そしてオルガンおよび聖歌隊のギャラリーが一列に並び、さらに中心軸に沿って椅子が配され、北、南、西の三面に棧敷席が設けられる。この教会堂の特徴は、説教壇と祭壇を一体化した説教壇祭壇 (Kanzeltar) が採用された点であろう。説教壇祭壇という形式自体は、バロック期のルター派教会堂においてしばしば使用されていたもので³⁷、字義どおり、説教壇と祭壇を組み合わせてひとつにしたものである。リンク教会堂ではこの説教壇祭壇を、さらにオルガン・ギャラリーと統合させ、諸要素と空間の一体化を図った点が画期的だと言える³⁸。

リンク教会堂以降も「ヴァイスバーデン要綱」に則ったプロテスタントの教会建築が次々と現われた。そのひとつ、ロベルト・クルイエル³⁹とカール・モーザー⁴⁰の設計に基づくカールスルーエ (Karlsruhe, Baden-Württemberg) のルター派教会堂は、四隅に階段室を備えたギリシヤ十字型平面をもつ

集中式建築で、一九〇七年、ルターの誕生日である一月一〇日に献堂された(図23、24)。教会堂の中心軸上に祭壇、説教壇、オルガンが並び、そこから放射状に座席が置かれ、三面を棧敷席が取り囲むというのは、

先のリンク教会堂と同様である。しかしリンク教会堂よりも、さらに空間の一体化が進められた印象がある。その要因は、第一に、同じ十字型平面でありながらも、多角形ではなく直線で閉じられるという単純な形態や、ユーゲントシュティールの裝飾が⁴¹⁾、空間に明瞭性を付与している点、そして第二に、オルガン・ギャラリーと棧敷席が途切れることなく教会堂を一周することで、連続的な造形を創出している点に求められるだろう。第三の要因は、オルガン・ギャラリー側面に施された、彫刻家ヘルマン・ビンツ⁴²⁾のレリーフである。その主題には、「山上の垂訓」という、イエスによる説教の場面が選ばれた。イエスの足元を実際の説教壇と祭壇が垂直軸上に設置され、あわせてイエスの説教に耳を傾けるひとびとのレリーフが水平軸上に行列を成すことにより、オルガン・ギャラリーや棧敷席を含む諸要素の統一感を高め、空間の一体化がさらに促進されているのである。

七、二十世紀

最後に表現主義の例として、数々のプロテスタントの教会建築を手掛け、一九一九年には『新建築より (Vom neuen Kirchbau)』という建築理論書を発表するなどの建築理論家でもあったオットー・バルトニク⁴³⁾について触れておきたい。ゲッツはバルトニクについて、「ヴァイスバーデン要綱」の

理想を受け継いだ建築家だと見なしている。バルトニクは先のカールスルーエのルター派教会堂に関する議論の中で、集中式建築のもつ空間の方向性、とりわけ着席した会衆の視線について分析し、ルター派教会堂の地上階に着席した会衆の視線は説教壇に集まるものの、棧敷席に着席した会衆の視線は、空間の中心という、機能上はなんら意味をもたない場所に集中してしまう点に注目した。こうした集中式建築がもつ空間の方向性は、バルトニク自身も取り組むべき課題となった⁴⁴⁾。

そうして一九二二年から一九二三年にかけて構想されたのが《星の教会堂》である(図25)。これが実行されることはなかったものの、プロテスタントの教会建築が有すべき機能とのかちの問題に対して新しい解決策を示した点において注目される。《星の教会

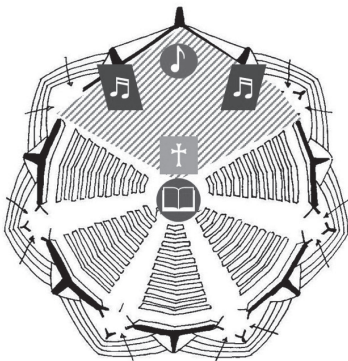


図25 オットー・バルトニク《星の教会堂》、1922年

堂》は七芒星のような円形にちかい平面をもつ集中式建築である。その七分の三を占める菱形の領域(図25上部)は(礼拝教会堂)としての機能を有して

おり、その頂点、すなわち建築空間の中央に祭壇が置かれ、さらにオルガンと聖歌隊席が配されている。残りの部分は、(礼拝教会堂)を囲むような(説教教会堂)となっており、その頂点は、祭壇の下に設けられた説教壇である。換言すると、建築空間の中央に祭壇と説教壇が併置され、機能に応じて(礼拝教会堂)と(説教教会堂)とに分界されつつも、また同時に、一体化された空間が創出されている⁵⁵⁾。まさしく「ヴィーสบアーデン要綱」が求めたように、説教壇と祭壇が同等の価値をもち(第四条)、すべての視線が祭壇へと導かれ(第三条)、空間印象の一体化(第二条)が達成された空間なのである。

おわりに

本稿では、ドイツの作例を中世から二十世紀までたどりつつ、プロテスタントの教会建築における特徴を概観した。宗教改革により礼拝の方法や聖像に対する態度が変わり、説教や讃美歌が重視されるにもなっており、教会建築も、カトリックとプロテスタントでは様相を違えることになる。とりわけ説教壇が祭壇に匹敵するほどの重要性を帯びるようになった点、そして説教を聴く会衆のための棧敷席が重視された点は、教会建築の内装に大きな影響を与え、祭壇と説教壇、棧敷席、そしてオルガン(あるいはオルガン・ギャラリー)や洗礼盤は、プロテスタントの礼拝における機能を考慮しながら、さまざまな配置を模

索することになる。その際、時代ごとの宗教的そして政治的状况に応じて、空間の均質化や一体化が求められることもあれば、あるいはまったく逆に、カトリック的なヒエラルキー空間が推奨されることすらあった。本稿で取り上げたドイツのプロテスタント教会建築はごく一部であるが、この限られた作例の中にも、思想と教会建築の間で、さまざまな試行錯誤のなされた痕跡を見て取ることができるであろう。

註

- 1 初期キリスト教時代の教会堂については、以下を参照。高橋保行・土屋吉正ほか『教会建築』日本基督教団出版局、一九八五年、四一〜五一頁(引用箇所は四四頁)。
- 2 本内陣障壁は十三世紀頃に作られたものと推測されているが、後期ゴシックの特徴も観察され、あわせて三十年戦争後に修復された可能性もある。Monika Schmeizer: *Der mittelalterliche Letzner im deutschsprachigen Raum*, Petersberg 2004, S. 50-57.
- 3 拙稿「祈りの空間 ニュルンベルクのザンクト・ローレンツ聖堂におけるシュトース作《天使の挨拶》「祈念像の美術」(ヨーロッパ中世美術論集三)、竹林舎 二〇一八年、一九六〜二一八頁。
- 4 Corine Schleit: *Donatio et memoria. Stifter, Stiftungen und Motivationen an Beispielen aus der Lorenzkirche in*

- Nürnberg, München 1990, S. 16-75.
- 5 ルター派が聖像に対して穏健な態度をとったのに対し、ヴィンクリ派とカルヴァン派は聖像破壊運動を遂行し、身廊で礼拝を執り行った。高橋・土屋 一九八五年、前掲書、七九～八二頁。
- 9 Georg Stolz: Der Englische Gruß in St. Lorenz zu Nürnberg, in: Bayerisches Landesamt für Denkmalpflege (Hg.): *Der Englische Gruß des Veit Stofz zu St. Lorenz in Nürnberg*, München 1983, S. 1-25; Ostermayer Vera / Thomas Bachmann: *Das Sakramentshaus von Adam Kraft in St. Lorenz, Nürnberg*, Nürnberg 2008, S. 42.
- 7 Lucas Cranach der Ältere, ca. 1472-1553.
- 8 Hans-Joachim Krause: Cranachs Bildausstattung der Torgauer Schlosskapelle. Eine Rekonstruktion, in: *Schloss Hartenfels und die Schlosskirche in Torgau*, Marktleberg 2017, S. 137-188.
- 6 本礼拝堂のことは、以下を参照。Hansjochen Hancke: Die Torgauer Schloßkirche und die Burgkapelle St. Martin, in: *Burg- und Schlosskapellen*, Stuttgart 1995, S. 133-137; Hans-Joachim Krause: Die Schlosskapelle, in: *Torgau. Stadt der Renaissance*, Torgau 2003, S. 39-47; Ders.: Zur Entstehungsgeschichte und ursprünglichen Gestalt der Kapelle und ihrer Ausstattung, in: *Schloss Hartenfels und die Schlosskirche in Torgau*, Marktleberg 2017, S. 89-112.
- 10 現在のオルガンは、東ギャラリー上にある。
- 11 Walther-Gerd Fleck: Stuttgart, Altes Schloß, Schloßkirche, in: *Burg- und Schlosskapellen*, Stuttgart 1995, S. 138-143.
- 12 Peter Poscharsky: *Die Kanzel. Erscheinungsform im Protestantismus bis zum Ende des Barocks*, Gütersloh 1963, S. 18-21; Kathrin Ellwardt: *Kirchenbau zwischen evangelischen Idealen und absolutistischer Herrschaft*, Petersberg 2004, S. 16-17.
- 13 Ellwardt 2004, *op. cit.*, S. 19-20.
- 14 本教会堂は、第二次世界大戦で破壊されたのち、再建された。
- 15 Reinhold Wex: *Ordnung und Unfriede. Raumprobleme des protestantischen Kirchenbaus im 17. und 18. Jahrhundert in Deutschland*, 1984, S. 91-93.
- 16 本教会堂のことは、以下を参照。Glemens Jöckle: *Dreifaltigkeitskirche, Speyer*, Regensburg 2011 (5. Aufl.).
- 17 ホーレンツェ王のことは、アウグスト二世。
- 18 ホーレンツェ王のことは、アウグスト二世。
- 19 Anton Raphael Mengs, 1728-1779.
- 20 本聖堂のことは、以下を参照。Georg Dehio: *Sachsen I*, München / Berlin 1996.
- 21 George Bähr, 1666-1738.
- 22 Stiftung Frauenkirche Dresden (Hg.): *Frauenkirche Dresden*, Leipzig 2016, S. 5-6.
- 23 Heinrich Magirius: *Die Dresdner Frauenkirche von George Bähr*, Berlin 2005, S. 182.
- 24 Stiftung Frauenkirche Dresden 2016, *op. cit.*, S. 19-20.
- 25 加納和寛「プロイセン式文論争と使徒信条 ドイツ〈使徒信条論争〉前史としての視点から」『基督教研究』七八号、二〇一六年、八七～一〇一頁。

- 26 Karl Friedrich Schinkel, 1781-1841.
 27 なお説教壇は、国王の希望により、引き続き入り口の向かいに設置された。Helga Franz-Duhme: Die Einfußnahme Friedrich Wilhelms III. von Preußen auf den protestantischen Kirchenraum in Berlin, in: *Geschichte des protestantischen Kirchenbaues*, Erlangen 1994, S. 66-74, bes. S. 71-74.
 28 シンケルの設計案については、以下を参照されたい。Karl Friedrich Schinkel. *Geschichte und Poesie* (Ausst.Kat. 2012), Berlin 2012, Kat. 115, 116; ヴルベン・ゴッペンント「建築家シンケルとヘルリン 十九世紀の都市環境の造形」杉本俊多訳、中央公論美術出版、一九八五年、一八八〜一九四頁。
 29 Ausst.Kat. 2012, *op. cit.*, Kat. 115, 116; プレント、一九八五年、前掲書、一九三頁。
 30 ケルン大聖堂の位置付けについては、以下を参照。棚橋信明「一八四二年のケルン大聖堂建設祭におけるカトリック勢力とプロイセン国王」『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅲ社会科学』一五号、二〇一三年、四五〜六一頁。
 31 以下に全文が掲載されている。「」は引用者による補足、あるいは省略を示す。Peter Genz: *Das Wiesbadener Programm. Johannes Otzen und die Geschichte eines Kirchenbautyps zwischen 1891 und 1930*, Kiel 2011, S. 28-31.
 32 Genz 2011, *op. cit.*, S. 31-33. 以下も参照されたい。Paul Kaiser: Das sogenannte Eisenacher Regulativ von 1861. Ein kirchenrechtliches Phantom, in: *Geschichte des protestantischen Kirchenbaues*, Erlangen 1994, S. 115-118.
 33 Emil Veessenmeyer, 1857-1944.
 34 以下に全文が掲載されている。Genz 2011, *op. cit.*, S. 43.
 35 Johannes Otzen, 1839-1911.
 36 本聖堂については以下を参照。Ralf-Andreas Gmelin: *Der Dom der kleinen Leute. Ein Porträt der Wiesbadener Ringkirche, ihrer Baugeschichte und Architektur*, Wiesbaden 2008 (3. überarbeitete Aufl.); Genz 2011, *op. cit.*, S. 42-45.
 37 当時、説教壇祭壇は「ライースバーテン要綱」に適したものであると評価されていた。Poscharsky 1963, *op. cit.*, S. 214, 241.
 38 バロック期の北部および中部ドイツでは、説教壇祭壇の上にオルガンを設けること自体は少なくなかったと指摘されている。Genz 2011, *op. cit.*, S. 44-45.
 39 Robert Curjel, 1859-1925.
 40 Karl Moser, 1860-1936.
 41 第二次世界大戦でひどい被害があったため、ステンドグラスは一九六一年に新しくデザインされたものが取り付けられた。Jürgen Krüger (Hg.): *Kirchen in Karlstraße und die Synagoge*, Ubstadt-Weiher 2015, S. 100-102.
 42 Hermann Binz, 1876-1946.
 43 Otto Bartning, 1883-1959.
 44 Genz 2011, *op. cit.*, S. 99-103.
 45 ヴォルフガング・ペーメント「表現主義の建築」(下)長谷川章訳、鹿島出版会、一九八八年、三二一〜三二二頁、Genz 2011, *op. cit.*, S. 102-103.

図版目録

Ausst.Kat. 2012, *op. cit.*: 図10; Georg Dehio: *Baden-Württemberg I*, Berlin 1993: 図11; Dehio 1996, *op. cit.*: 図12; Genz 2011, *op. cit.*: 図13; Jöckle 2011, *op. cit.*: 図14; Wilfried Koch: *Baustilkunde*, München 2003 (24. Aufl.): 図15; Krause 2017, *op. cit.*: 図16; Magirius 2005, *op. cit.*: 図17; Jörg Ohlemacher: *Kirchen erkunden*, *Kirchen erschließen*, Köln 2010: 図18; Thomas Linder: *Evangelische Stadterche Freudenstadt*, Freudenstadt 2016 (3. Aufl.): 図19; Kupferstichkabinett der Staatlichen Museen zu Berlin - Preussischer Kulturbesitz: 図17—19; ① Verlag Schnell & Steiner: 図11; 筆者撮影: 図14, 17, 18, 23.

* 平面図上の記号は筆者が加えたものである。